

アレクサンドリアのフィロンのpistis理解*

原 口 尚 彰

はじめに

1 語学的分析

- 1.1 古典ギリシア語におけるpistis (πίστις)
- 1.2 七十人訳聖書におけるpistis (πίστις)
- 1.3 初期ユダヤ教におけるpistis (πίστις)
- 1.4 新約聖書におけるpistis (πίστις)

2 フィロンにおけるpistis (πίστις)

- 2.1 語学的分析
- 2.2 神のpistis (πίστις)
- 2.3 人間のpistis (πίστις)

3 結論

はじめに

ギリシア語名詞pistis (πίστις)は「信実」「証拠」「信仰」等を意味する言葉であり、古典文献に広く使用されている。この名詞はギリシア語訳旧約聖書（七十人訳聖書）ではヘブライ語エメトやエムーナー（真実、信実）の訳語として用いられるため、約束したことを必ず果たす神の「信実」という意味が強くなる。新約聖書においては旧約的な理解を前提にしながらも、神の信実に対する人間の応答に焦点が当てられるので、この名詞も神やキリストを信じる人間の「信仰」という意味で使用されることが多い。

アレクサンドリアのフィロンは一世紀のアレクサンドリアに生きたユダヤ人哲学者であるので、ギリシア語名詞pistis (πίστις)について当時のギリシア・ローマ世界の慣用的な用法に慣れ親しんでいる一方で、旧約聖書以来の聖書的用法も心得ていた。彼はpistis (πίστις)をしばしば社会生活において自分の言葉の真实性を立証する「証拠」という意味で使用する一方で、民に与えた約束を守って成就する神の「信実」という意味で使用する。さらに、聖書の神を信じない異邦人世界に信仰の可能性を論証する弁証的意図があったので、「信仰」という意味で使用することもあり、この点では新約聖書の用法とも接点を持っている。

本論考はこれらの特色をフィロンの著作の語学的・神学的研究によって明らかにする。まず、予備的考察として名詞 *pistis* (πίστις) の古典文献やギリシア語訳旧約聖書における用例の特色を考察した後に、フィロンの用例をリストアップし、語学的分析を加える。次に語学的特色の背後にある思想的特色を考察し、当時のユダヤ人哲学者が置かれていた思想的状況を考慮しつつ、思想史位置付けを試みて結論に達したい。

1. 語学的分析

1.1 古典ギリシア語における *Pistis* (πίστις)

古典ギリシア語において確かであることを基本的語義とする名詞 *πίστις* は、人間の「信頼」(ヘシオドス『仕事と日々』372; ソフォクレス『オイディプス』950, 1445; プラトン『国家』VI 511e; VII 533e-534a; アリストテレス『ニコマコス倫理学』1162b)、「確信」(ピンダロス『ヌメアー祝勝歌』8.44; アリストテレス『ニコマコス倫理学』1154a)、「誠実」(ヘロドトス『歴史』8.105.2)を意味している¹。この単語は社会生活の様々な場面で使用され、人間への信頼を作り出すための「保証」や(プラトン『法律』III 701c; 『パイドロス』256d; ヘロドトス『歴史』9.91, 92; トウキュディデス『ペロソネソス戦史』5.45.2; クセノフォン『アナバシス』1.2.26; 『ギリシア史』1.3.12)、信頼性を証明する「証拠」(プラトン『国家』505e; 『パイドン』70b; アリストテレス『弁論術』1355b.35; 1414a. 35; イソクラテス『弁論集』3.8)、さらには信頼できる者への「委託」(ポリュビオス『世界史』5.4.12; IG 7.21.12)を意味する²。

1.2 七十人訳聖書における *Pistis* (πίστις)

七十人訳聖書において名詞 *πίστις* は殆どの場合、確かであることを基本的語義とするヘブライ語名詞 *エメト* (אֱמֶת) または *エムナー* (אֱמֻנָה) の訳語となっており、「信実」を意味している(サム上21:3; 26:23; 王下12:16; 22:7; 代下31:12; 34:12; 詩33[32]:4; エレ5:1, 3; 7:28; ホセ2:22; シラ15:15; 22:23; 40:12; 41:16; 46:15他多数)³。ヘブライ語名詞 *אֱמֶת* はしばしば *ἀλήθεια* (真理) とも訳されており(創32:11; 47:29; ヨシユ2:14; サム下11:6; ミカ7:20; ネヘ9:33; 詩25[24]:5; 26[25]:3; 40[39]:11; 54[53]:7他多数)、七十人訳において、*πίστις* (信実) と *ἀλήθεια* (真理) は互換的に使用されている⁴。

名詞 *πίστις* は客観的真理ではなく、主体的真実を表しており、人が言葉を守って実践する誠実さや職務に対する忠実さを意味している(王下12:16; 22:7; 代下31:12; 34:12; ホセ2:22他)。預言者たちはしばしば正義に反する社会の現状を示すしるしとしてイスラエルに信実が失われていることを非難している

*本稿は2017年度～2020年度 科学研究費助成事業(基盤研究C「アレクサンドリアのフィロンの倫理思想: 聖書学的・思想史的考察」; 課題番号17K02628)による研究成果の一部である。

1 LSJ, 1408; *BDAG*, 1669; R. Bultmann, “πιστεύω, πίστις κτλ.,” *TWNT* 4:174-177.

2 LSJ, 1408; *BDAG*, 1669.

3 Bauer-Aland, 1332-1333; R. Bultmann, “πιστεύω, πίστις κτλ.,” *TWNT* 6:174-228; G. Barth, “πίστις, πιστεύω,” *EWNT* 3:216-231; 原口尚彰『パウロの宣教』教文館、1998年、198頁を参照。

4 Dennis R. Linsay, *Josephus and Faith: Πίστις & Πιστεύω as Faith Terminology in the Writings of Flavius Josephus & in the New Testament* (Leiden: Brill, 1993), 23-25; James D. G. Dunn, “Once More, PISTIS CRISTOU,” in *Pauline Theology*, Vol.4; eds. E. E. Johnson and D. M. Hay (Atlanta: Scholars, 1997), 76.

(申32:20; エレ5:1, 3; 7:28; 9:22他)。他方、この言葉は契約を通して民に与えた約束を守る神の信実について使用され、その不変性を強調している(サム上21:3; 26:23; 詩33[32]:4; IIマカ7:6)。

尚、πίστιςを「信仰」の意味で用いた例は七十人訳の正典部分にはなく、外典部分に散見されるだけである。IVマカバイ記は、セレウコス朝のヘレニズム化政策の下でユダヤ教が禁教になっていた時代に、律法を破って豚を食べることを断固拒否して殉教した七人の兄弟とその母があったことを報告している(IIマカ7:1-42)。彼らの行動の根底にあったのは、神への信仰(πίστις)であるとされている(IVマカ15:24; 16:22)⁵。

1.3 ヘレニズム・ユダヤ教におけるpistis (πίστις)

シラ書においては神の変わらない信実(πίστις)を前提にした上で(シラ40:12)、人間の信実(πίστις)に焦点を当てている。イスラエル人は律法を守って神への信実(πίστις)を果たすと共に(15:15)、社会生活において誠実(πίστις)を実践することが求められる(22:23; 27:16; 40:17; 41:6)⁶。シラ書はアブラハムについて、「彼はいと高き方の律法を守り、その方との契約に入った。その身において契約を確立し、さらには試練の中で信実である(πιστός)ことが判明した」と述べる(シラ44:20)。ここで言及されている試練とは創世記22章に語られているイサクの奉獻のことであり、この劇的な出来事を通してアブラハムの神への信実(πίστις)が示されたと解釈している(Iマカ2:52; シラ44:19-23; ヘブ11:17; ヤコ2:21-24を参照)⁷。他方、サムエルやイザヤら預言者については、神の言葉を告知する職務への忠実(πίστις)ということが強調されている(シラ46:15; 48:22; 49:10)。

ユダヤ人歴史家であるフラビウス・ヨセフスの歴史記述においてπίστιςは、古典ギリシア語のような「証拠」(ヨセフス『ユダヤ古代誌』2.37, 218; 15.69, 260; 16. 400; 17.104; 19.16; 『ユダヤ戦記』1.470, 472, 485, 601; 4.337; 6.195)、「信頼」(『ユダヤ古代誌』2.57; 6.326; 7.47; 15.201)、「信実」(『ユダヤ古代誌』6.276; 7.160; 13.48; 14.192; 15.291; 17.79, 246; 『ユダヤ戦記』1.94, 207; 2.121, 341; 3.448; 5.121; 6.357; 『アピオン駁論』2.134他)の意味で使用されると共に、神への「信仰」(『ユダヤ古代誌』17.179; 18.14; 『ユダヤ戦記』1.14; 『アピオン駁論』2.163, 169)という意味でも使用されている⁸。「信実」という意味での用例は、七十人訳聖書の正典部分の伝統的な用例に近いが(サム上21:3; 26:23; 王下12:16; 22:7; 代下31:12; 34:12; 詩33[32]:4; エレ5:1, 3; 7:28; 9:22; ホセ2:22他)、政治史のプロセスを描写することの多いヨセフスの歴史記述においてこの単語は、政治勢力間に成立した同盟関係への忠実さを指して使用されることが多い(『ユダヤ古代誌』6.276; 7.43, 160; 13.48; 14.192; 17.79, 246; 『ユダヤ戦記』1.94, 207; 2.341; 3.448; 5.121; 6.357; 『アピオン駁論』2.134他)⁹。

この言葉を神への「信仰」という意味で用いる用法は、外典部分に見られる新しい用例に並行してい

5 原口『宣教』196-197頁を参照。

6 Linsay, *Josephus & Faith*, 44-45.

7 Linsay, *Josephus and Faith*, 50.

8 原口『宣教』196-199頁を参照。

9 Linsay, *Josephus and Faith*, 79-80; David M. Hay, "Pistis as 'Ground for Faith' in Hellenized Judaism and Paul," *JBL* 108 (1989):469.

るが (IVマカ15:24; 16:22を参照)、ヨセフはユダヤ人の宗教的志向を論じる文脈において、神への信仰がユダヤ人の魂に深く刻み込まれ、取り除くことが出来ないことを強調している (『アピオン駁論』2.163, 169)。さらに、ユダヤ教の様々な宗派を論じる文脈においては、ファリサイ派の信仰内容を指してこの言葉を使用している (『ユダヤ古代誌』18.14)¹⁰。

1.4 新約聖書におけるpistis (πίστις)

新約聖書において、古典ギリシア語のようなπίστιςの「証拠」としての用例は少なく、使17:31にしか見られない¹¹。新約聖書においてこの名詞は、ほとんどの場合、「信実」(ロマ3:3)または「信仰」(マタ15:28; マコ11:22; ルカ8:25; ロマ1:8; Iコリ2:5; 15:14, 17; IIコリ1:24; 10:15; フィリ2:17; Iテサ1:8; Iペト1:22; IIペト1:5他) という意味で使用されている¹²。

a. 神のpistis (πίστις)

新約聖書においてπίστιςが旧約的な「信実」の意味で用いられることは比較的稀であるが、契約神学的な神の信実という思想は記述の前提になっており、形容詞pistos (πιστός) を用いて、「神は信実である (πιστός ὁ θεός)」と度々述べられている (Iコリ1:9; 10:13; IIコリ1:18; Iテサ5:24)。名詞πίστις について言えば、ロマ3:3においてτὴν πίστιν τοῦ θεοῦという表現が、「神の信実」という意味で用いられている¹³。パウロはローマ書3章においてパウロはユダヤ人であることの利点を論じる関連で、イスラエルの救済史において顕された神の真理の問題に言及している (ロマ3:4, 7; さらに、15:8を参照)。イスラエルの民は、神の言葉として律法の戒めを託されたのに、それらを忠実に守ることをしなかった。しかし、パウロによれば民の不信実や偽りによって神の真理や信実は無効とならない (3:3-4)。神が世に下す裁きにおいては、人間の偽りに対して神の信実が際立つ結果となる (3:3)。救済史においては、人間の側の偽りを乗り越えて、神の信実が真理として示されるのである¹⁴。

b. 人間のpistis (πίστις)

新約聖書や使徒教父文書においては、この名詞が神の信実に対する応答としての人間の信仰を表す場合が圧倒的に多い。新約聖書では、σου ἡ πίστις(あなたの信仰) という表現が共観福音書に出て来るし (マタ15:28)、ἡ πίστις ὑμῶν(あなた方の信仰) という表現が、共観福音書や (ルカ8:25)、書簡文学や (ロ

10 Linsay, *Josephus and Faith*, 89.

11 Linsay, *Josephus and Faith*, 95; 尚、Hay, "Pistis," 471-472はガラ3:23, 25においてπίστιςが「信仰の根拠」という意味で使用されているとしているが、これは無理な読み込みであり賛成出来ない。これらの箇所においてπίστιςは客観化されて「キリスト教信仰」という意味で使用されているが、「根拠」という意味は強調されていない。

12 Bauer-Aland, 1332-1333; R. Bultmann, "πιστεύω, πίστις κτλ.," *TWNT* 6:174-228; G. Barth, "πίστις, πιστεύω," *EWNT* 3:216-231.

13 K. F. Ulrichs, *Christusgalube*, WUNT 2.227 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2007), 178-179; 原口尚彰『ローマの信徒への手紙』新教出版社、2016年、125-126頁を参照。

14 Christof Landmesser, *Wahrheit als Grundbegriff neutestamentlicher Wissenschaft*. WUNT 113 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1999), 246-247; 原口尚彰「パウロにおけるイエス・キリストのピステイスの意義」『人文学と神学』第8号、2015年、17-34頁を参照。

マ1:8; Iコリ2:5; 15:14, 17; IIコリ1:24; 10:15; フィリ2:17; Iテサ1:8; Iペト1:22; IIペト1:5他)、使徒教父文書に(イグ・エフェ13:1; デイダケー16:2)数多く見られる。ローマ書においては、特に4章においてアブラハムの信仰に関してこの名詞が使用されているのが目立つ(ロマ4:5, 12, 16)。

さらに、マコ11:22; イグ・エフェ16:2においてπίστις θεοῦという句は「神の信実」ではなく、「神への信仰」を表しており、この場合属格のθεοῦは目的格的に用いられている。こうした名詞πίστιςの信仰としての用法は、七十人訳の外典部分や(IVマカ15:24; 16:22を参照)、ヨセフに見られる用例に並行しているが(『ユダヤ古代誌』18.14; 『アピオン駁論』2.163, 169)、新約聖書における使用頻度は遙かに高い。

2. フィロンにおけるpistis (πίστις)

2.1 語学的分析

フィロンの著作において名詞πίστιςは、古典ギリシア語のような社会生活において用いられる「保証」や(フィロン『律法総論』1.90)、弁論において用いられる「証拠」(フィロン『世界の創造』57; 『アブラハム』273; 『律法総論』1.90; 『ヨセフ』242; 『モーセの生涯』2.288)の意味の他に、七十人訳聖書に見られる「信実」(フィロン『ヨセフ』258; 『モーセの生涯』2.177; 『言葉の混乱』31; 『改名』182他)や、新約聖書に見られる「信仰」(フィロン『アブラハム』268, 270, 271, 273; 『移住』132; 『モーセの生涯』2.259; 『寓意的解釈』3.164; 『神のものの相続人』14, 91, 92-93, 94; 『徳論』39, 216)という意味でも使用されている¹⁵。

名詞πίστιςが「証拠」という意味で使用される用例は、フィロンに非常に多く見られる(フィロン『世界の創造』57, 84, 93, 109, 116, 147; 『混乱』156; 『移住』171; 『アブラハム』39, 141, 226, 247, 273; 『律法総論』59; 『律法各論』1.69, 70, 85, 273, 290; 2.43, 143, 227; 3.114; 4.40, 50, 156, 176; 『ヨセフ』51, 52, 127, 158, 242; 『モーセの生涯』1.247, 261, 280, 298; 2.12, 40, 142他)。

この言葉は社会生活において事実が何であるかが争われている場面では、人の証言が真実であることを示す証拠を意味する(『ヨセフ』51, 52, 127, 158, 242)。フィロンは創られた世界を観察することを通してその創作者である神の存在の認識に到ると考えている(『律法各論』3.187-191)¹⁶。特に、『世界の創造』57と『供物』147において彼は、全能者による世界の創造を語る聖書の言葉の真実性の論証の一環として、光である太陽と月が昼と夜を支配している事実こそが、天体の創造について語られていることが真実であることを示す証拠(πίστις)であるとしている。見えざる魂が人間存在の中核にあって、人間のなす営みを主導していることは、見えざる全能の神が実在し、世界を支配していることの証拠(πίστις)であると考えている(『律法総論』59-60)¹⁷。

神が唯一であるように、神殿もエルサレム神殿一つであるべきであることを示す証拠(πίστις)は、当時の世界中からエルサレム神殿での礼拝に参加するために巡礼が集まって来ることである(『律法各論』1.68-70)。

15 Lindsay, *Josephus and Faith*, 56-62; 原口『宣教』196-199頁を参照。

16 Charles A. Anderson, *Philo of Alexandria's Views of the Physical World*, WUNT 2.309 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2011), 86-87.

さらに、モーセの律法が神より与えられたものであることを示す証拠は、律法の規定が不変であり、変わることがないことであるとされる（『モーセの生涯』2.12, 39-40）。偶像礼拝を禁じ、偽証することを禁じ、安息日を守ることを勧め（『律法各論』2.224）、両親を敬うことを勧める十戒の言葉は（2.225-226）、偽りでないことが明らかであるだけでなく、理に適った証拠（πίστις）により真理を確証することになる（2.227）。フィロンは見えざる神による世界の創造と支配や、モーセを通して与えられた律法の規定を伝えるトーラーの言葉の真理性は、理に適った証拠によって支えられていると考えている。神の真理は理性による思索によって認識することが出来るとされ（『創造』77; 『モーセの生涯』1.48; 『律法各論』3.45, 124）、創造主の認識は哲学の源である（『律法各論』2.186, 237）。

2.2 神のpistis (πίστις)

神の信実（πίστις）は人間の信実の模範となるものであるが（フィロン『改名』182-183）、具体的には民との契約を忠実に守ることを意味する。旧約聖書はイスラエルの歴史における神の真実（信実）を語るのを常とする（創32:11; ヨシュ2:14; 詩25:5; 26:3; 40:11; 57:11; 61:8他多数）。フィロンは旧約聖書に神がイスラエルの父祖たちに対して誓約をしたという記事があるのに注目し（出11:11-13を参照）、神が誓ったことの意義について論じている（『寓意的解釈』3.204-208; 『供物』89-97）。誓いは通常何かしらの疑念がある時に、神を証人として引き合いに出し、自己の発言が真正であり、信頼に足ることを強調するためになされる（『寓意的解釈』3.204）。しかし、神が誓いをなされる場合、神にはそもそも何も不確かなことはなく、疑念を抱く余地はないにも関わらず、神はご自身の言葉の真理性を明らかにする（『寓意的解釈』3.205-208; 『供物』91）。この場合の神の言葉の真理性とは、嘘をつかず常に真実を語り、また、与えた約束の言葉は必ず守ることに帰着する。神の言葉は誓いによって信頼性を増すのではなく、逆に神の言葉であることによってその誓いの真実性が増すのである（『供物』91-93）。

2.3 人間のpistis (πίστις)

フィロンは人間が神によって託された務めに対して信実、忠実であることを重視すると共に（『寓意的解釈』2.67; 3.103, 204; 『ヨセフ』258; 『モーセの生涯』2.177他）、人間の持つ神への信仰に度々言及する（フィロン『移住』132; 『アブラハム』268, 270, 271, 273; 『神のものの相続人』94）。フィロンによれば、神々の内で実在するのは天地の創り主なる神だけである（『アブラハム』80, 143; 『律法各論』1.28; 『徳論』65, 102）¹⁸。異教の神話が語る神々は実在することはなく、存在すると思われているだけである（『律法各論』1.51）。ユダヤ教信仰の基礎を形成しているこのような真理についての認識は、トーラーを学ぶことを通して得られる。信仰者は真理を愛する者であり（『夢』2.19; 『律法各論』2.58; 『観想的生活』64）、真理の探究者である（『十戒』65; 『自由』12; 『律法各論』1.59, 63; 2.181; 『徳論』182）。律法を学ぶことは信仰者に相応しい哲学的営みである（『カインの子孫』102; 『夢』2.127）。毎週トーラー（律法）が読まれその説き明かしがなされる安息日礼拝は、ユダヤ人たちが「先祖伝来の哲学」より知恵を

17 Sharon Weisser, "Knowing God by Analogy: Philo of Alexandria against the Stoic God," *SPA* 29 (2017):46を参照。

18 大貫隆「フィロンと終末論」『生活大学研究』第5巻、2020年、15頁を参照。

汲み取り、哲学的訓練を受ける場である（『観照的生活』28;『ガイウス』156）。

フィロンはイスラエルの父祖アブラハムの信仰（πίστις）に言及し、活ける神のみを信じる信仰者の模範としている（フィロン『相続人』94;『アブラハム』72-76, 268, 270, 271, 273）¹⁹。フィロンはアブラハムを「義人」と呼ぶ（『移住』110, 121;『相続人』94）。それは創世記15章6節において、「アブラムは神を信じて、そのことが義と認められた」と述べられているからである（『律法の寓意的解釈』3. 228;『改名』177, 186, 218;『相続人』94）²⁰。他方、創世記22章にあるアブラハムのイサクの奉獻の行為を（創22:1-19）、フィロンは「神の前に喜ばれる」ことであると述べる（『改名』39, 40）。創世記22章のイサクの奉獻の出来事においてアブラハムが試練に打ち勝ったことを、フィロンはアブラハムが義と認められた根拠であると考えている（『神の不動性』4）。同様な考えは他の初期ユダヤ教文書にも見られる（Iマカ2:52; 知10:5; シラ44:19-21; ヨベ18:14-16）。初期ユダヤ教にとり、神への信実（信仰）と善き業は対立するものではない。神に喜ばれる善き業（正義）は神への信実（信仰）の現れであり、両者は一体であると考えるのである（Iマカ14:35を参照）。この点は、救いを得る手段としての信仰と律法の業を対立するものと考え（ロマ3:21-28; 9:30-10:4; ガラ2:16）、一貫してアブラハムを信仰の人として描くパウロとは対照的である（ロマ4:1-23; ガラ3:6-21を参照）。

フィロンはアブラハムを義人とするばかりでなく、知者（ソフォス）と呼んでいる（『移住』94, 109, 122;『相続人』2, 88, 91, 258, 280, 313;『アブラハム』77, 80, 82, 84, 109, 118, 132; 142, 168, 202, 213, 229, 255, 261, 272, 275）。アブラハムは知者であり、知恵を愛する者（=哲学者）である（『改名』70）。しかし、人間の知恵の究極は、私たちが何も知らないことを知ることであり、神のみが知恵ある方であることを知ることであり（『移住』134）。この立場は、無知の知を説いたギリシア哲学者ソクラテスの考えに近い（『ソクラテスの弁明』21dを参照）。人間的な考え（ドクサ）ではなく、知恵の淵源である神の意思に従うことこそが、真の知者と呼ばれるに相応しいということになる。自分の考えではなく神の言葉に従ったアブラハムの行動は、無知の知を実践する模範的例である（『移住』130）。

フィロンは神への信仰（πίστις）を徳の一つとして挙げている（フィロン『アブラハム』268, 270, 271;『モーセの生涯』1.90）。さらに、フィロンは敬神（εὐσέβεια）や（『ケルビム』96;『供え物』27;『悪は善を襲う』72, 73;『徳論』175;『賞罰』162;『摂理』67）、敬虔（θεοσέβεια）を（『律法各論』4.134, 170）、正義（δικαιοσύνη）と並ぶ徳として挙げている²¹。神への信仰（πίστις）と神を畏れ敬うこと（εὐσέβεια）とは、唯一の神への信仰を違った表現で述べたものであるが（フィロン『移住』132を参照）、前者は神を信じる行為としての側面を強調している。後者は当時のギリシア・ローマ世界で徳とされていた敬神（εὐσέβεια）の観念をユダヤ教的な一神教の前提から再解釈して用いたものである。

周辺世界であるギリシア・ローマ世界では、敬神（εὐσέβεια）が思慮や自制や正義や勇気と並ぶ主要な徳目となっているが（プラトン『国家』1.331A; 4.427E; 10.615C;『法律』1.630B, 631B-D, 888BC; デイ

19 Sean A. Adams, "Abraham in Philo of Alexandria," in Sean A. Adams and Zanne Domoney-Lyttle eds. *Abraham in Jewish and Early Christian Literature* (London - New York: T & T Clark, 2019), 79-80.

20 七十人訳聖書の翻訳は特に断らない限り、筆者の私訳である。

21 Harry A. Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1947) 2:213-214もこの点に注目する。

オゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』3.80,83; 7.92, 102; ストバイオス『抜粹集』2.60.9を参照)、信仰(πίστις)は主要な徳として挙げられていない²²。しかし、知3: 4, 9には希望と真理と愛の組み合わせが、シラ24:18には愛と畏れと知識と希望の組み合わせが、IVマカ17:2-4には信仰と希望と忍耐の組み合わせが見られ、ユダヤ教に固有な徳目の形成が見られる。初期キリスト教の伝統では、信仰と希望と愛をキリスト者の生きる基本姿勢を示す三つの徳の一つとして挙げており(Ⅰコリ13:13; Ⅰテサ1:3; 5:8; エフェ1:15-18; コロ1:4-5; ヘブ10:22-24; 黙2:19; バルナバ1:4, 6; ポリュ・フィリ3:3を参照)、フィロンの倫理教説と並行している。

3. 結論

フィロンによる名詞πίστιςの用い方は、ヘレニズム・ユダヤ教の中でも非常に際立った特色を持っている。第一に、フィロンは多くの場合、この名詞を「証拠」の意味で使用している。この傾向は、同時代のユダヤ人歴史家であるヨセフスにも認められる。ヨセフスはこの単語を社会生活における発言内容の真正性を示す証拠を指して使用していることが多いが(ヨセフス『ユダヤ古代誌』2.37, 218; 15.69, 260; 16. 400; 17.104; 19.16;『ユダヤ戦記』1.470, 472, 485, 601; 4.337; 6.195)、フィロンは聖書の言葉の真理性を示す証拠に関して用いている(フィロン『世界の創造』57, 84, 93, 109, 116, 147;『混乱』156;『移住』171;『アブラハム』39, 141, 226, 247, 273;『律法総論』59;『律法各論』1.69, 70, 85, 273, 290; 2.43, 143, 227; 3.114; 4.40, 50, 156, 176;『モーセの生涯』1.247, 261, 280, 298; 2.12, 40, 142他)。このような神学的議論を根拠付ける証拠として名詞πίστιςを用いた例は、ヨセフスには一件しか見られないが(ヨセフス『ユダヤ古代誌』19.16を参照)、新約聖書にも並行情がある(使17:31)。フィロンは見えざる神による世界の創造と支配や、モーセを通して与えられた律法の規定を伝えるトーラーの言葉の真理性は、理に適った証拠によって支えられ、理性的議論によって立証されると考えていた。フィロンは、理性を通して創造主の存在を認識することは可能であると考えていたのである(『律法各論』1.32)。

新約聖書において名詞πίστιςを用いた例は、先に見たように使17:31に見られるだけであり、しかも証拠として提示された事柄はギリシア・ローマ世界の知識人たちによって拒絶される結果となっている。この箇所は使徒言行録17章によれば、使徒パウロがアテネのアレオパゴスの評議所において、ストア派の哲学者たちからなる聴衆の前で、自らが宣べ伝えるイエス・キリストの福音の内容を語る演説の後半部分に出て来ている(17:21-34)。演説の前半部分においてパウロは創造主なる神の業について語った後(17:22-29)、終わりの時の裁きに言及して悔い改めることを勧める(17:30)。彼は終末の裁きが起こることの証拠(πίστις)としてキリストの死からの復活の出来事に言及している(17:31)。しかし、このことを耳にした聴衆は、嘲笑い、もうそれ以上話を聞こうとはせず、演説は中断したまま終わってしまった(17:32-33)。哲学者たちには死者の復活の知らせは理性に反する馬鹿げたことに思われたのであった。この演説の中断の出来事の描写は、福音宣教が理性的議論による説得を超える超自然的な要素を含んでいることを示している²³。

22 原口尚彰「フィロンの正義理解」『フェリス女学院大学 キリスト教研究所紀要』第3号、2018年、15-16頁を参照。

第二に、フィロンは人間の持つ神への信仰に言及する際にも名詞πίστιςを用いている（フィロン『移住』132;『アブラハム』268, 270, 271, 273;『相続人』94）。この用法は七十人訳聖書の外典部分や（IVマカ15:24; 16:22を参照）、歴史家のヨセフスに散見される用例に並行しており、（『ユダヤ古代誌』18.14;『アピオン駁論』2.163, 169）、異邦人世界の中で民族の伝統を守って見えざる唯一の神の存在を信じ、その律法を守ることの意義を弁証する意味を持っている。

新約聖書においてこの名詞は多くの場合「信仰」（マタ15:28; マコ11:22; ルカ8:25; ロマ1:8; Iコリ2:5; 15:14, 17; IIコリ1:24; 10:15; フィリ2:17; Iテサ1:8; Iペト1:22; IIペト1:5他）という意味で使用されている²⁴。初期キリスト教は、ヘレニズム・ユダヤ教の用法を継承しつつ、イエス・キリストへの信仰の意義を周辺世界や信徒たちに繰り返し説く文脈で、他の用法が陰に隠れるほどの頻度でこの名詞を使用し続けたのであった。

第三に、フィロンはイスラエルの父祖アブラハムの信仰（πίστις）に言及し、神を信じる信仰者の模範としている（フィロン『神のものの相続人』94;『アブラハム』268, 270, 271, 273）。特に、フィロンは創世記15章6節において、「アブラムは神を信じて、そのことが義と認められた」と述べられてことを根拠に（『律法の寓意的解釈』3. 228;『改名』177, 186, 218;『相続人』94）、アブラハムを「義人」と呼ぶ（『移住』110, 121;『相続人』94）。他方、創世記22章のイサクの奉獻の出来事においてアブラハムが試練に打ち勝ったことを、フィロンはアブラハムが義と認められた根拠であると考えている（『改名』39, 40;『神の不動性』4）。こうした見方は初期ユダヤ教文書や（Iマカ2:52; 知10:5; シラ44:19-21; ヨベ18:14-16）、ユダヤ人キリスト教文書と軌を一にしている（ヘブ11:17-18; ヤコ2:21-24）。この点は、アブラハムを業によらない信仰の人として専ら描くパウロ書簡とは対照的である（ロマ4:1-23; ガラ3:6-21を参照）。

フィロンはアブラハムを義人とするばかりでなく、度々知者（ソフォス）と呼んでいる（『移住』94, 109, 122;『相続人』2, 88, 91, 258, 280, 313;『アブラハム』77, 80, 82, 84, 109, 118, 132; 142, 168, 202, 213, 229, 255, 261, 272, 275）。アブラハムは知者であり、知恵を愛する者（＝哲学者）である（『改名』70）。自分の考えではなく神の言葉に従ったアブラハムの行動は、無知の知を实践する模範的例である（『移住』130）。

第四に、フィロンは神への信仰（πίστις）を義と対になる重要な徳として挙げている（フィロン『アブラハム』268, 270, 271;『モーセの生涯』1.90）。ユダヤ教に固有な徳目の形成として、IVマカ17:24には信仰と希望と忍耐の組み合わせが見られる。初期キリスト教文書の多くは、信仰と希望と愛をキリスト者の生きる基本姿勢を示す三つの徳の一つとして挙げており（Iコリ13:13; Iテサ1:3; 5:8; エフェ1:15-18; コロ1:4-5; ヘブ10:22-24; 黙2:19; バルナバ1:4, 6; ポリュ・フィリ3:3を参照）、フィロンの倫理教説と並行している。

（はらぐち・たかあき）

フェリス女学院大学国際交流学部元教授

23 原口尚彰『ロゴス・エートス・パトス 使徒言行録の演説の研究』新教出版社、2005年、128-132頁を参照。

24 Bauer-Aland, 1332-1333; R. Bultmann, “πιστεύω πίστις κτλ.,” *TWNT* 6:174-228; G. Barth, “πίστις πιστεύω,” *EWNT* 3:216-231.